

城下町から中心市街地へ 歴史とともに変化した中央地区

中央地区は、鹿児島城築城の頃から城下町として整備が進められました。それ以前は「中福良」とも呼ばれ、甲突川流路が現在より北側を流れていたため、洪水の危険性が高く、田地が多く、人々が生活しやすい場所ではありませんでした。江戸期に行われた甲突川の流路変更や海岸部の埋め立て・整備により、武士や町人の居住区域は拡大しました。特に下町は、鹿児島藩にとって重要な経済拠点としての役割を担うようになります。

また明治維新以後、まちの在り方は大きく変化します。封建社会の終焉とともに、上級武士の居住地区であった現在の西千石町や東千石町などは、庶民の生活の場や娯楽・飲食のまちへと発展していきます。

こうして人々が集う地区となり、交通環境も急激に整備され、路面電車の開業や重要港湾としての港拡大などによって、さらに「人」も「お金」も「情報」も「文化」も集中する地区に進化します。それだけに太平洋戦争の空襲による被害も大きく受けましたが、戦後も中心市街地としての役割は失われることなく、見事に復興することができました。

中央地区は鹿児島市のみならず鹿児島県の顔であり、これからもその役割を担いつつ変化し続ける地区といえるでしょう。

1. 鹿児島城下の名残

鹿児島城を中心とした城下町が江戸初期から形成され、特に海岸部や甲突川周辺に拡大し、中央地区は武士町と町人町の両方の位置付けがありました。しかし、明治 10（1877）年の西南戦争や昭和 20（1945）年の太平洋戦争の空襲の被害により、城下町としての名残は地名などでしか伝わっていません。

①松原神社（南林寺跡）

曹洞宗の寺院で、15 代当主貴久の菩提寺として建立されたのが南林寺です。鹿児島城下の中心地に隣接していたことから周辺の武士の菩提寺でもあり、墓地も広大でした。明治 2（1869）年の廃仏毀釈によって廃寺となり、それを引き継ぐように島津貴久を御祭神とする松原神社が建立されます。



松原神社

②名山堀

鹿児島城の外堀の役割を担っていたのが名山堀です。現在の鹿児島市役所本館前の電車通りの一部と名山町の長屋街などの場所が堀でしたが、明治維新後に徐々に市街地形成のために埋め立てられました。堀に映る桜島の姿から名山堀の名前になったとされています。

③二官橋・三官橋の地名

諸説ありますが、現在の松原小学校近くに、明（中国）から帰化した沈一官が居住しており、一官が住んでいた通りから城下の西側の通り名を一官、二官、三官と命名したといわれています。橋は、かつての甲突川流路とされる清滝川に橋が架橋されていました。現在飲食店が多く立ち並ぶ二官橋通りだけが、市民になじみのある地名として定着しています。



二官橋通り

④地蔵角

地蔵角といえば地蔵角交番がある場所として市民にも認識されています。この場所には江戸期から地蔵堂があり、南林寺墓地の入り口にあたることから、木像の地蔵が安置されていました。この地蔵は加治木の海岸で発見されたと伝わり、現在地に移設されたのは享保2（1717）年とされています。現在祀られている石像は、近年のものです。



地蔵角の地蔵

⑤調所屋敷

現在の平之町の城山側は、江戸期は上之平と呼ばれ、城山の麓に鹿児島藩の財政改革に成功した調所広郷の屋敷がありました。実績をあげ藩主斉興から拝領したものです。現在はマンションが建ち、その角に小さな看板が立っています。



調所屋敷

⑥納屋町などの下町

江戸期の鹿児島城下における町人町の1つが下町です。江戸後期の下町は15町（六日町、中町、呉服町、大黒町、金生町、築町、新町、今町、堀江町、船津町、納屋町、泉町、弁天町、汐見町、住吉町）でした。会所という町を統括する役所は大黒町に置かれていました。明治、大正を経て戦前までは、下町として結束した会があり、現在の商店街組合のような形で活動していたようです。



「下町区会」と刻まれた石碑
がある大國主神社（金生町）

⑦照國神社の変遷

現在照國神社がある一帯には、江戸期には天台宗寺院の南泉院がありました。御祭神は島津斉彬で、斉彬は安政5（1858）年に亡くなっていますが、文久3（1863）年に照國大明神の神号が与えられ、翌年に神社が寺の一部に建立されました。その後、南泉院が廃され社殿や社域も拡大し、現在に至ります。太平洋戦争の際には空襲で被災し、境内にある石灯籠にはその傷跡が残っています。昭和4（1929）年竣工の大鳥居にも機銃掃射の弾痕があり、平成19（2007）年の補修の際に穴を埋めたものの、色を分けて場所が分かるようにしてあります。



照國神社

2. 明治期から大正・昭和初期のものがたり

中央地区は、江戸期は鹿児島城下であり、武士町とそれに付随する町人町が広がっていましたが、西南戦争以後、特に上級武士の居住地区であった東千石町や西千石町、山之口町や千日町は徐々に商業地へと変わり、劇場や店舗の集積する繁華街として発展しました。また、かつての町人町であった下町も、港を中心に店舗がさらに集中し、鹿児島市街地の中心として発展しました。

①山形屋

安永元（1772）年、出羽国で紅花商をしていた源衛門が、鹿児島城下の木屋町に呉服屋を開いたのが始まりとされています。明治維新後も石灯籠通りで店舗を構えるなどして営業していましたが、大正5（1916）年に西日本随一と称された鉄筋コンクリート造のデパートを建設し、市民を驚かせました。現在も鹿児島県民のデパートとして愛され続けています。



山形屋

②山下小学校（向田邦子や林美美子）

明治11（1878）年創立の山下小学校は、鹿児島市街地の中心地域が校区の学校です。多くの偉人を輩出した加治屋町も校区に含まれ、校内にはその顕彰を目的とした部屋もあります。「放浪記」などの作品を世に出した作家の林美美子や脚本家・小説家としても知られる向田邦子も一時期在籍していました。特に向田邦子は自身の子ども時代を題材にしたエッセイの中で、山下小学校在籍時の思い出を綴っています。

③映画館街

鹿児島市街地随一の繁華街が天文館地区です。明治20年代には「天文館定席」という劇場があり、浪曲の興行や芝居などが営業されていました。その後、活動写真が登場すると稻荷座という劇場で興行があり、明治後半には高千穂座や明治座、中座といった劇場が次々に天文館地区に誕生しました。そして大正2（1913）年には定員1,250名という巨大な鹿児島座が千日町に登場し、娯楽を求める人々で天文館地区はにぎわうようになります。繁華街の繁栄は、こうした劇場や映画館の登場に起因しています。



映画館街（天文館通り）

④沖ノ村の誕生

明治初期、鹿児島市街の遊郭は、現在の鹿児島駅近くの築地にありました。しかし、周辺で鉄道敷設が行われ、明治32（1899）年に遊郭が清滝川や甲突川の河口域へ移転しました。これが沖ノ村です。明治40（1907）年には20軒もの妓

楼があったとされ、そこに向かう清滝川に架かる橋には思案橋の名が今も残ります。思案橋というのは、遊郭に行くか行かないか思案（迷う）することに由来し、日本三大遊郭といわれた長崎の丸山遊郭の思案橋が有名です。現在は、当時の賑わいを伝える建物がわずかに残っています。

⑤西本願寺と門前町

信教の自由を明治政府が通達したのは明治9（1876）年のことでしたが、鹿児島県において浄土真宗が地域で信教されるのは西南戦争以後のことです。明治11（1878）年に現在の場所に西本願寺が誕生し、その後に本堂などが時代とともに改築されて巨大寺院となります。西本願寺の門前通りは参拝者も多く、賑わいも生まれ、門前は繁華街としての様相を呈するようになりました。

⑥秋葉神社

現在は加治屋町の西郷隆盛誕生地前にひっそりとたたずんでいます。鳥居が建物の前にあり、神社であることは分かります。この神社は、昭和15（1940）年頃に山下小学校に在籍していた向田邦子のエッセイに登場します。ただ、戦前は現在の場所ではなく西千石町にあったようです。



秋葉神社

⑦興業館（旧鹿児島県立博物館考古資料館）（国登録有形文化財）

明治16（1883）年に九州沖縄八県連合共進会の会場として建てられました。建設には西本願寺からの寄付もありました。石造で尺貫法で設計されており、意匠はルネッサンス様式を基調としながら、インド風の装飾もみられます。大正3（1914）年の桜島噴火や太平洋戦争の空襲にも耐えた貴重な建築物です。



興業館

⑧鹿児島県立博物館（旧鹿児島県立図書館）（国登録有形文化財）

現在の県立博物館の建物は、昭和 2（1927）年に鹿児島県立図書館として竣工しました。当時の県立図書館の蔵書は 42,691 冊で、九州随一の図書館と称されました。昭和 53（1978）年に現在の県立図書館が建造され、その後は博物館として利用されています。



鹿児島県立博物館
(旧鹿児島県立図書館)

⑨鹿児島銀行別館

大正 7（1918）年に第百四十七銀行の本館として建造されました。大正 7 年当時、現在の山形屋前の電車通りは大きな通りではなく、広馬場通りが賑わいを呈していましたこともあり、建物の入り口は電車通り側ではなく、広馬場通りに面していました。二階建てのルネッサンス様式の建物で、当時としては珍しいコンクリート造でした。



鹿児島銀行別館
(2016 年撮影)

昭和 34（1959）年本店竣工に伴い別館となり、平成 19（2007）年には国登録有形文化財に登録されていましたが、鹿児島銀行本店別館鹿児島銀行新本店（本店および別館ビル）の建設によって平成 28（2016）年に解体されました。

3. 戦後から現在のものがたり

太平洋戦争の度重なる空襲によって中央地区は大きく被災しました。瓦礫の山と化したまちでしたが、見事に復興します。鹿児島市の中心市街地として、商業施設やアーケードが整えられ、戦前以上の賑わいを呈するようになります。

その後、まちは商業地や交通拠点である西鹿児島駅周辺まで拡大し、平成 16（2004）年の九州新幹線の部分開業をきっかけとして西鹿児島駅から鹿児島中央駅に駅名が変更される頃には、鹿児島経済の商圈も大きく天文館周辺と鹿児島中央駅周辺へ二極化するようになります。

①昭和大通り（ナポリ通り・パース通り）

太平洋戦争の空襲によって鹿児島市は市街地に甚大な被害を受けました。その復興事業の一環として、街路整備が大規模に行われました。その 1 つが西鹿児島駅と



昭和大通り

鹿児島港を結ぶ道路の整備です。幅を 50m とり、その広さに賛否ありましたが、昭和大通りとして誕生しました。この通りは後に姉妹・友好都市の名前をとって駅から新屋敷までがナポリ通り、新屋敷から港までがパース通りと改められました。

②旅館や料亭

戦前からあった旅館や料亭も戦後に復活営業し、昭和 30 年代には天文館周辺や城山の麓を中心に点在していました。旅館としては鶴丸荘、岩崎谷荘、中原別荘、吹上荘、九州館、松の枝旅館、南洲館、西野旅館などがあり、現在でも営業している店舗もあります。料亭も鶴屋、玉村などがありました。

③新屋敷交差点ロータリー

新屋敷周辺は戦後の区画整理事業において、鹿児島市街地の副都心的役割を期待された場所でした。公共施設として、市立病院や中央警察署、新制中学校である甲東中学校が建てられました。また建物が面する通りにはロータリーが設けられ、当時の西鹿児島駅や鹿児島港、高見馬場、荒田方面からの道路が交錯していました。しかし、交通量の増加に伴い渋滞も発生したことから、昭和 42 (1967) 年にロータリーはなくなりました。



新屋敷交差点付近

④西駅一番街

一番街の起源は、西鹿児島駅（通称・西駅）前に開かれた朝市です。様々な物資が集まり、商店が立ち並んだことから、昭和 30 (1955) 年には一丁目、二丁目、三丁目と連なっていました。昭和 46 (1971) 年に中心駅の機能が鹿児島駅から西鹿児島駅に移るなどしてますます賑わうと、昭和 48 (1973) 年には全てにアーケードが設置されました。平成 16 (2004) 年に九州新幹線が部分開業、駅名が鹿児島中央駅に改称され、平成 22 (2010) 年には再開発ビルとなるエールプラザが誕生しました。鹿児島中央駅の発展とともにあるのが西駅一番街です。



西駅一番街

⑤西駅から中央駅へ

大正2（1913）年に鹿児島駅から東市来駅まで鉄道が延伸され、武駅が誕生しました。当時は武の地元の駅という位置づけでしたが、この路線が熊本県の水俣駅と通じることによって新しい路線による鹿児島本線が誕生し、昭和2（1927）年に西鹿児島駅と名前が変わります。それでも鹿児島駅が鹿児島市における本駅でしたが、戦後に旅客駅として乗降客数を伸ばした西鹿児島駅の役割が大きくなり、平成16（2004）年の九州新幹線の部分開業に際して鹿児島中央駅と改称し、県内の駅の中で最も大きく発展した駅となりました。

⑥なつかしい朝市

終戦直後の物資の乏しい頃、農村漁村地帯である南薩地域から、指宿枕崎線を利用して、行商の方々が西鹿児島駅前広場で品物を売ったのが始まりです。駅周辺の開発に伴い、売り場の一部は駅の東側にも設置され、テント小屋や周辺の路面に新鮮な野菜や魚などが並ぶようになりました、「西駅朝市」として親しまれるようになりました。



朝市付近

時代と共に行商に通う方も高齢化し、現在は店舗数も減っています。

⑦鹿児島中央高校の変遷（国登録有形文化財）

鹿児島中央高校の校舎は、昭和10（1935）年に第一高等女学校の校舎として建てられたものです。同年陸軍特別大演習があり、建物が大本営となりました。昭和24（1949）年からは県立鶴丸高校の校舎となりましたが、昭和38（1963）年に鹿児島中央高校が下伊敷で開校、昭和39（1964）年に現在の場所に移転し、現在に至ります。同時に鶴丸高校は現在の場所である薬師に移転しました。



鹿児島中央高校校舎

⑧高島屋

高島屋の創業者である犬伏家は、四国阿波の藍玉商でした。鹿児島進出は明治初年で、昭和11（1936）年に大見高島屋デパートを誕生させました。昭和50（1975）年には「高島屋プラザ」として大規模に店舗を一新させ



センテラス天文館

て、鹿児島の若者層をターゲットとして店舗づくりを展開してきました。しかし、平成 30 (2018) 年に閉館して、現在はセンテラス天文館として営業しています。

⑨林田ホテル

林田産業グループは、霧島のホテルや北薩方面を中心としたバス事業を展開していましたが、天文館中心部にもバスセンターを設置するなど大規模な店舗開発を行ってきました。バスセンターは後に林田ホテルとなり、その立地から天文館の待ち合わせ場所の定番ともなりました。ホテルにはレストランや喫茶店、パン屋なども併設されて多くの人々に愛された場所でした。



林田ホテル跡

⑩文化通り

戦前までは、江戸期に日置島津家の屋敷があったことを由来とする「日置裏門通り」の名で親しまれています。歓楽街の 1 つで、通りの北を通る路面電車に「日置裏門通り電停」もありました。戦後、この場所にあった会社名の一部から文化通りと呼ばれるようになります。ただし、昭和 24 (1949) 年の地図には、電車通りから南側だけでなく、北側（城山側）の通りにもその名が見られます。



文化通り

⑪名山堀の変遷

江戸期には鹿児島城の外堀であったのが名山堀です。明治期に入ると少しづつ埋め立てられました。現在、名山町三街区と呼ばれる長屋が立ち並ぶ区画は戦後に埋め立てられます。戦後すぐの頃には、現在のホテルニュー福丸付近から鹿児島港と接しており、小さな船も行き来していました。かき船と呼ばれるかき料理を食べさせる屋形船も停泊していました。昭和 25 (1950) 年頃に衛生面を理由として堀の埋め立てが進められ、その上に住宅や店舗が立ち並ぶようになりました。



名山堀三街区

⑫平田公園の整備

宝暦治水の名で知られる鹿児島藩による木曽三川の治水事業の総奉行として活躍した家老の平田靱負の屋敷跡は、現在の平田公園にあたります。戦後、治水工事の顕彰や岐阜県との交流を目的として公園整備が進められ、昭和 29（1954）年には平田靱負の銅像が公園内に設置されました。現在も薩摩義士顕彰活動の拠点であり、多くの方が訪れる公園となっています。



平田公園の平田靱負銅像

⑬八坂神社の移転

鹿児島五社の1つである八坂神社は、元は現在の祇園之洲に鎮座していました。鹿児島市を代表する伝統行事の1つ「おぎおんさあ」が行われ、祭りの際に神輿が立ち寄る場所である御旅所の1つが平田公園でした。平田公園前には昭和 48（1973）年に神社が移転していましたが、その後、昭和 63（1988）年に御神託によって、再び江戸期からのゆかりがあった現在地に移されました。一時期八坂神社があった平之町の場所は、現在マンションになっています。



八坂神社跡

⑭中央公園の変遷

江戸期には、造土館・演武館があった場所で、中央公園として昭和 25（1950）年に開設されました。都市部のオープンスペースとして、当初はテニスコートやプールといったスポーツ施設も充実した公園でした。平成 3（1991）年に公園地下に駐車場が整備されたのに伴い、平成 5（1993）年には噴水や芝生広場を設けた公園に生まれ変わりました。



中央公園

⑮県文化センターの誕生

昭和 35（1960）年頃から総合的文化センターを切望する県民の声が高まりだし、昭和 38（1963）年には県文化センター調査委員会が発足しました。昭和 41（1966）年、音楽・演劇・オペラなどが上演できるホー



県文化センター

ルに加え、プラネタリウムなどの科学施設や会議室も併設した「鹿児島県文化センター」が誕生しました。平成18(2006)年からネーミングライツが導入され、現在は「宝山ホール」の愛称で親しまれています。

【中央地区の主な未指定文化財リスト】

1. 鹿児島城下の名残	
1	松原神社（南林寺跡）
2	名山堀
3	二官橋・三官橋の地名
4	地蔵角
5	調所屋敷
6	納屋町などの下町
7	照国神社の変遷
2. 明治期から大正・昭和初期のものがたり	
8	山形屋
9	山下小学校（向田邦子や林美美子）
10	映画館街
11	沖ノ村の誕生
12	西本願寺とその門前町
13	秋葉神社
14	鹿児島銀行別館
3. 戦後から現在のものがたり	
15	昭和大通り（ナポリ通り・パース通り）
16	旅館や料亭
17	甲東中学校前ロータリー
18	西駅一番街
19	西駅から中央駅へ
20	なつかしい朝市
21	高島屋
22	林田ホテル
23	文化通り
24	名山堀の変遷
25	平田公園の整備
26	八坂神社の移転
27	中央公園の変遷

